北窓瑣談

前篇
三

234
3

門1曾5
234
巻7

北窻瑣談巻之三

梅華仙史橘春暉著

一人の所生なるハ語るべ[illegible]とも理。出[illegible]し亦ハさ[illegible]あり悪声一[illegible]び世の流布しても[illegible]ものなる。善[illegible]を[illegible]ハ盛徳の事なれ。おし遥誉[illegible]して流く害れ所しし男の居しが。鈴奈の孝子れ[illegible]幼年の時も名高く公より九襲美し給ひ[illegible]年長しく後も撮り[illegible]又博奕あどさく好して萬の常人なら[illegible]ず。其里の庄屋あと仏の器を[illegible]れ[illegible]加へ[illegible]見を加へ[illegible]ど。[illegible]入[illegible]ど風俗[illegible]しがいなで[illegible]や是ホの

まかせて思へば。善事を称誉もすぐるもこゝろみたる
し。人始めはざるるあしよく終りの事もあしといふ古語
ル思ひ合されし

一我父母終身安穏ましく衣食の労苦しハ推が庇蔭あり
しや。古主君の庇蔭あり。我身何きの地より出く何れの
家より成出せしか。古主君の庇蔭あり。我親属安穏ある
祖先の祭り絶ざるハ推人の庇蔭なりや。古主君の庇蔭と
我身何きの慶ふ学ひ何れの人を師とし筆硯ましく親し
むやふあるしや。古主君の臣岡山先生を師とし米穀を食
て幼年の時ふ乃ぱまよ経学ましまあり。又古主君の庇蔭

ありかゝ思ひ法ぎられも古主君の恩恵我身生涯を更あり
子孫まで忘却ましたるあり出ざる乃事新ら哉
学ゆれとも孫の乃ちもとかゝを絶るなり

一漢の代ものハ租稅を定に。粟米四六乃法といふ
故ふ漢乃嘉量あとハ一斛入乃桝と六斗入の桝と一つ桝ふ
てつくて作りたるものなり。四六乃法とも兵粮用意米あと
久しく貯ふる米を粟米ましく取入る時も一斛ゝ。又当分の
扶持米ばかりを米ふ舂りて入る。其時ハ六斗なり。これ粟
一斛を舂れば米六斗ほなる故なり。日本も王代乃頃も
法を用られしまや今ル禁裡主殿寮の官人乃下級米

を宗和り所よりと原ニ。一石といふ處ハ米五斗九升を細む
るなり。是六斗あれども一升ハ雜費ふ引とありとぞ。余ら
お知る人よ屋殿寮の下司南山城みゝの系村より米を
とるふ多如しと語ます。近時武家ふも一石といふ處ハ米
四斗を後世ことなり。是我四ツ物成といふ。ゆゑ〻〻あしで
乃多少ゆゑ接世の奇法といふ事
一古人源氏物語ふ於ても其文章ハ我ほど〻〻称美せざる
人無ふ。当年の歌も無下ふ拙しとそし給ふ人多し。余
思ふよ此物語乃奇ハ又ふよ一体の風ゆゑ〻〻漢伯悠長成
をもひとし風流の気象ゆゑ〻〻餘情多し附ふ歌多く
ハ源氏尚産の昂徳ふ仕立ふるものあれども〻〻ゆゑ〻〻
此物語乃奇を他ふ撰集なるの如く倫ふハ類をもち
ずといふ事
一漢学の文章ハ才ゆゑ〻〻とくゞ。学問の力厚〻〻書ゞし
是ふ出ふる面ゆゑ〻〻結ふる。多厚〻〻久〻〻ゆゑふ足
ふると同し理ふて学ふ厚く作るゆ金科の地力あゆゑ也
来ずゝふとあり。文章ハ為ふて為し但しかし仏好ゆゑ
ハ全篇ふ一句を紆く出ず。学上ゆゑ〻〻ける助字を惜
みく全玉のごとく用ゆゑし。汪道昆の文ふ助字少し漢書ふ
多一のゝごとく。学ゆゑ〻〻拙ゆゑ文章乃助字多ゆゑ極て用ひ紆ふ

多く足若し。論語あり格物致知を是も言語應對
乃摸擬を傍より生じ出る也。出処したる体制あれども示波
多先なり。是も文章の変体なり常法ハ古へ
し。用ひ新の書まくも孟子あり文章の正格とも為し
一和文にお辭あり窓ハ獨り月ハ對したる打ものぞ。年ころ
ゑし妹しうしるゑ些し加ゑ事ハ先ハ仕て男の出る
ろを。富貴ある人の常ハ傍み侍るものの多先きりこの境
ハ知らを居ふるし
一安藤ハ出羽嶋城下辺ハパタくとふ人の所にく神灵の物也
もものしより何者ゑるを知る人あし夜法人家窓外據先お

ふ寄ろく寄と近くパタくと寄を窺ふく寄戸
祇園先れむ。五六十も遠の寄方と寄くパタくとふ井
寄ものいくも如此て法ゑる何物ゑるを知らとあしと彼国乃
人壽安物侍りあり先
一余天下を漫遊して所所名山岳乃。僻遠の地
ハ寄絶乃山ハ多れど。皆祇岳作りて世の国好乃人ゑるゑ
せくやと思ひしが。既ゑ古賢乃他を作ゑる山くハ多れば先他
家の詩文集ハ就く山くの祇岳撰ひ出し集て特寄ゑる
山ハくだ。自くハ祇せんものをと。近先ハ足尚ゑるハ侍ふく
かく集めぬるハ。又人乃ふ祇笑む。東武渋井平左衛門山志五

て既に多く集めたりといふべし。余り集まることもやめんとす

近年至法井子に至る人は徒に浪花より満ちて世

に名を名山に求めんか何ぞ

一組来の書を新元の顔を無他の書家の多一所に集まる。

頃雲山惇信廣澤なる世に聞へ明代の書風時運に叶ひ

て行はれし折柄なり。但来獨り時運に引きずられて一家を

成せり。天物徒なる墨帖より出来たりとなすべきにて

ざれども。唐土の墨帖の中に実にて能くなし。其本質は

乃楷書にして加ふるに其筆致の傷きる故なり。江青先

生亦氣韻なる東海先生書材餘り所なく其顔に来る

所なり故腹中の墨所なる故なり。其他近世多く書

を見し。近年は乃草篆隷は二体は一種の風韻なるべき

なる易なるべし

一印章篆刻の一技。近来如に多く人多し其雅趣氣韻

人と秦漢乃古印に恥ざる所なり。文雅乃技の漢土乃古代

に遜歩なるべきも只篆刻の一技乃みあり。其他書画詩

文も明清に往世界を隔てたり

一本邦の詩家保以後の作家本邦の古昔に倣きふと雖

も以後も志しなど是まで以ふくは南蘭以来乃盛なる時とす

べし。秋田山あと五絶乃一体も吾ここに日本南蘭の一人也

と自負せし孔しとぞ。誠に他人より見るも苦敷しく
過言ふ人ハ多くは賞賛を近代に於ては貴族とも尊
び盛なるなれども。古人よりも見るべき上一変を
もなす道ふ高るの域ハ遠く離れて。能詩ハ芭蕉の時
既実ふ盛ふしく極よ高きとふべし。以後とりどり
を分に出る時ハ多くハ見えや
一迎を以秋田が筆跡を見るふ。明人の區域を出るの所と
いぶべしとくども。雅趣俱集法の一人なるべし
一書ハ古今二王をもく至極とも彩と復嚬を容るべうる
ふ近世共向上の論出時く宋明をも奴隷のごくふ極ん
し学ふ所二王以下ふ逢るべくとて。日夜辛苦して十七帖
或ハ聖教序等を摸擬する人多し。今至人の書を見るふ形
ハ成ふ墨痕の十七帖聖教序ハ似れども。神彩気骨風韻
ふ高遠く高地を拂ふて見ること。多く活気近来乃鳥石庵
澤の業ふ小ふ不及事多くあれば。何ぞ明人を笑ん。義ふ智
永ハ唐人の出ハ深く学び取付て死道筋絶て無
ともいふべうるれども。中く易死ふ所ふ次宋人の気骨
ハ近来甚く髣髴と其區域を窺ふ似る人多るこ
とも。然れども是も多ふ加るの地ふて。荒を画て物ふ教を
示るの多し。共明人ハ時運移る故ハ時代近ち故ハ

徴仲枝山隔囲解伸玄宰あと生体々各格あれども始
乃人も学びた皆あり法多し。舎も亦多し明人よ不満あれ
ども多く造る所乃学ぶ所ハ明人の區域を出ること能ず
一人ハ天地の益なるを思べし世ぶし文字有る
人を医をおこをを賤しめども今太平の御代乃
生まる匹夫の身医業を外まして何事をおして
人の憂を救ふ吏たらんと思ふ
一宿疱ハ国大暦乃十八巻成り兼好法師観應元年二
月病にかゝ類。上皇ハ典薬頭和気清之をして伊賀国乃
越て療治せ令め。米穀三千石を賜ふ。伊賀守橘成忠使を
て奏ス 二月七日 兼好法師生死無常の急あるを素門乃收
ふ露ありとて茅茨不服米穀を迫村乃民よ絶せり云ふ 二
條良基公年来乃和歌乃友あるし多病を問ふが為りひ
そ多伊賀国に越る。二月十五日兼好伊賀国見山乃麓
田井之庄ハ寂寞 上皇を上湿勅云ふ 同廿五日米穀五
千石鳥目二千貫を賜ひ田井庄ハ墓を築死遍照寺乃僧
ハ余し伊賀国分寺に葬事を勤しむ同廿七日権僧都を贈
らふ 春暉四ふ。兼好ハ吉田の祠官なり格式の貴
人なる一つまで又多ハ多ハ戦国の時なり 強く多時事あれど
病に加へて後の事あるを。多虚実乃

し後ふ人ふも弓しふ園大暦ハ怪しむ気をかうをと云
しかることもなりや
一又塔尾ふ玉ハ格ふの物ゑり水精珊瑚隅瑠璃の如き真
乃玉ふハ中ぐ信景往年玉帯を見るしふ。色白くして
水精のごとく透明ふハあ[illegible]。霞茂陽て空殘をむがごし
其美あることなくしてふの有。有職者云是ハゴクといふ
まく紋を色ぐ一の皇鬼形獅子唐草唐花等なりとぞ
春暦ふ外くの殊玉を日本ふ多く産出れど。ゴクを日本
ふ産出る所なしと藁蔭堂あと物語ふ是。京都の宦家
ふも玉帯皆此ゴクを用ふ大家ふハ云乃ふ一の皇出ふ

御家ふ長サ六七寸幅四五寸許ふく質ふ玉美ふ一皇能を
彫ふ海真ふ精密殘極えるふ故毎度拝見しなり。何方ふ
乃ふ玉帯に用ふるる。彫刻の細工精密を極めたるふの也
宮ふ玉を切事泥乃ごとくなるしげきぞ。此細工ハ絶しがしと見
申。皆唐土の物なりといふ伝ふ何の代乃細工なりしや
一塔尾ふ海潮乃満干毎ふ吳なり大阪より後乃白石乃
海ふ[illegible]ハ五十余里ふるの海上ハ後ふ[illegible]より周防乃ふ[illegible]しふ
玉ふて四十里海潮上ハ[illegible]ふて高ぐ烈し。是より筑前の山上乃
岬ふ[illegible]四拾里潮下ハ満。是より西肥前の櫛嶋ふ[illegible]ハ十余
里潮又上ハ満ふ又長門乃ふ[illegible]洋乃奥ふハ潮北乃方ハ

さて也と。是時拍ずるふ大洋ふ也く〻潮の東西南北を経
し備ふるかたりを唐土瓊海の洲あり一月乃中ふ上十五日
を東へさし下十五日を西へさすと。是ハ赤竜中乃最奇なる事
なり扨前の海辺乃海の潮を常に大河のごとく三筋の急流
海中ふ打つく東へのごとく蓬莱ふて是ハ又奇なり
徒然草ふ伶人弘秋横笛を論じて。五の穴を飾りぶうし。千の穴
より皆穴ごとふ律を満て一律ごとを吹ときに五の穴乃
上乃間ふ調子をそなへ〻ぞ〻〻ぶうるをくるとひとしたる
を義ふ味あり。されむ出穴を吹時ハ必乃くぶしのけ方ぬ時ハ
物ふ合ずぶ。吹なるとを難しとらひし事を載せり。是弘秋が律

ふ合ふ〻穴故和声といふことを知ざる故なり。横笛を双調より
調を起し〻順八ふ和声を求めく下音ふ到て止む。〻〻五上
の穴乃乃ふ一律をぬをみく島種を穿たゞ横笛一管乃調
ふ法を〻〻楽器と成ぶ。又中六乃穴の乃ふ二律をぬ
きをえとく〻六の穴を含て吹ぶ。よく一越乃真声をはんや
弘秋が考く調ふ荒涼のことあり。又景茂が呂律の物ふ吹りる
き人乃とがあり。器乃失ふ方ぶとらひし〻律呂ける〻〻嘉学
さてし妄言なり。只弘秋をそらんとて向上らひ論をいひ
出し〻人を欺しなり。業ふ屈く其事〻〻〻。さりんぐ
生きとし〻〻人を侮ひ欺くハ情なるのあり

一伊前の儒士湯浅子祥が常山記談とゝ書ふ加藤清正寒
天ゟ朝鮮渡海のゝ戦ひし往ゟ王正美の待を引く風勢
面疑裂凍結髭有声とゝふゟ迫しと出しゝ。余ゝ賀列手取川
の風雪ゟ過く龍、霰堅如鐵寒風利似刀と作りしゟ思合せし
一同書ふ浅田直家伯耆ゝ城ゝくの軍ふ。ゟ経兵馬場十助鉄
炮ゟ右ゝ擦ゟ臀へかけく打通れゝきゝ。狂ふゝゝぞ
とゝふく進てゝゝふ又背割具足右の肩ゟいゟ胴の中を臀
まく打ぬき因くゝゝく倒れぬ。郎等来ゟ切ゟけく引ぬ
ゟ伊全快しく十助語ゝゝゝ八鉄炮ふ当ゟ切ゟ時大木ゟて俵
戦実通ゟ。ゟく。物の色皆牽牛花の色ふゝゝ

と浅ふ強通しく農とあく七十七才ゝく病死せり
一笏ゟむゝ八義氏ゟ弾ぜしゟ少や後霧庭州ゟ奇ゟ
如御筆を弾ふふ右の御手ゝ氏を学しゝ。学ふ
ゟ右ゝ御手勝ふ弾せふゟ故ふ。後ふ御くぜふゟ
一。又大後ふ芦川行幸笏をひく人ふふ氏作りく拍ふし
入まくくとゝふく作りと云是者のゟふゟ思合せし
一三光院殿御院色紙寸法。大ゟ竪六寸四分。小八竪六寸ゟ
横ゟ大小ゟ五寸六分。短冊寸法貴人ゟ長サ一尺ゟ寸八分
幅二寸。平人ゟ長一尺ゟ寸五分幅ゟ寸八分ゟとあり
一御神楽之次第

一庭燎　二榊木　元末　三韓神　元末
四早神　元末舞アリ　五鷹挽　元末　六篠波　元末
七千歳　元末　八早歌　元末五ツ舞アリ　九星　三首
吉々利々　元末　得錢子　元末　木綿作　元末
十朝倉　其駒　元末舞アリ

一國絡ふ載せ〻ふ周景王の鑄作し奪射律乃鐘唐の孔穎達の説ふ。此鐘在王城。鑄之。敬王居洛陽。蓋移就之也秦滅周。其鐘徙於長安。歴漢魏晉。常在長安。及劉裕滅姚泓。又移於江東。歴宋齊梁陳。時鐘猶在。魏使魏收聘梁。收作聘遊賦云。珍此瑤器。無射在縣。是也。及開皇九年平陳。又遷於西京置太常寺。時人悉得見之。至十五年。勅毀之。春暉曰是固瑤器然而考古律之法物無過之者。勅毀之可惜之至也。而又怪晉荀勗考古律。不言及此鐘。不知孔説果是否

一漢土律呂家黄鐘の律を論ずるに勿論く本邦每好ら徒然草ふ黄鐘律の夠鐘を論ぜしより後。ぞ此るをりふ人いれど〻真乃黄鐘律成聴ること弱く又其律は夠鐘を鑄るこゝろ〻人カけ乃ぶ〻ゝるこゝろ〻ふ〻てこゝ〻ゝ余天下ふ漫遊しく數多の鐘を聴ふ黄鐘律ふ近き鐘ふ稀あり。只霧満寺の鐘古物ありと聞く。實政四年壬子乃玄彼寺ふ到る。こゝる大坂天満の北半里許乃長柄村乃蹤

村雲分寺とゝる小村の禪院ゝ所ゝ音真の黄鐘律ニ大サ
口の經ゝ曲尺ゝ一尺九寸五分厚サ一寸五分 鈕頂ハ傍ゝ菅
所ゝ穴内外ゝ透ゝ銘文二ツ所ゝ一ツゝ鑄銘ニ一ツゝ彫
銘ゝ鑄銘ゝ

太平十年二月日 ○寺棟梁元○
○金鐘入三百斤 長二尺四寸二○

如此ニ五六字ゝ滅ニ
尺ニ此銘ゝよりて北燕の馮跋太平十年戊午の鐘ゝ
漢土南北朝ゝ時分ゝ古律ゝ乱ゝ時ハ物亡ゝ
希代ゝ珍物ゝ此銘一説ニ太ゝ字ゝ天ゝ聖武天皇
の時ハ物ゝ鐘ゝ同作の鐘ニ三井寺ゝ所ゝ智
證大師唐ゝ渡ゝ時ゝ將来の物ゝ漢土ゝ物ゝ

彫銘ハ六七百年ゝ長門ゝ彫ゝ
門ゝ所ゝ寺ハ名ゝ尺ニ其後ゝ寺廢ニ此鐘ニ
土中ゝ埋ニ有ニ今ゝ二百年ゝ以ゝ
普清ゝ時ハ堀出ニ寺ニ納ニ
寺建立ゝ時鐘ニ寄附ゝ
とゝ家ゝ有ニ
ゝ
一過ニ年三井寺塔中微妙寺開帳ゝ時古鐘ニ 芙蓉紫秋
ゝ銘ゝ尺ニ銘ゝ
ゝ

大平四年壬子十二月日青龍寺

鐘百七十斤大匠作金慶則棟

梁六尋十四人玉長沈賢等

大平四年壬子日本允恭天皇元年也晉安帝義熙八年也

是鶴満寺の鐘と同じく北燕乃馮跋大平四年壬子乃作乃鐘なり智燈大師入唐八季唐の時より唐乃青龍寺より將來しとあれども。青龍寺北燕の時よりの寺なり。唐ハ隋を亡しなり。此年六月十七日門人辻三清成寺等人ハ隋を亡し。此年六月十七日門人辻三清成寺等人

松平六郎三十郎命し。三井寺ハ新羅鐘を足せしむる。微妙寺ハ新羅。前年開帳の時より出せし本坊宝蔵中の

猪ありとて宝鐘なり本坊金堂の傍乃宝蔵に納めり。此宝蔵の鍵頭りを財遷坊とよぶ。役者を財林坊と云。宝蔵の封ハ一山乃封ハ常ハ開くを怪まず。三十鐘を不足して空しく坊。財遷坊のお借りの鐘の長二尺。経り巾尺六寸五分。厚一寸三分ほ。銘ハ五寸五分唐青龍寺の鐘なり智證大師唐朝乃時渡し物なり。此鐘ハ本黄鐘律ありやいなや吉を決られた編しなし

一北燕太平元年、北魏の永興元年なり晉乃義熙五年なり通鑑紀事本末九十八巻馮跋滅後燕篇云。諸臣言於燕王跋曰。陛下龍飛遼碣。舊邦族黨傾首朝陽。以日為歳。請往迎

之。跋曰。道路數千里。復隔異國。如何可致。匡曰章武臨海。舟揖可通。出於遼西臨渝不爲難也。跋許之云云 春暉按。高句麗。爲北燕屬國。馮氏之滅。二世馮弘奔高句麗。男女老幼八十余萬人皆隨。此時三韓既爲日本屬國。則北燕貨物傳日本之多。實有故也

一北史馮跋傳曰。跋飲酒至一石不亂

一北史藝術傳信都芳傳曰。齊神武之亟相倉曹祖珽謂芳曰。律管吹灰術甚微妙絶未既久吾思所不至鄉試思之。芳留意十數日便報珽曰。吾得之矣。然須河內葭莩灰祖對試之無驗後得河內灰用術應節便飛餘灰即不動也云云

一琵琶の書は三五要録といふ書なり。又三五中録といふ書も有。胡琴教録なども世間に多くあれども。此二書は稀なる物なり。或人の説に三五要録和名抄所引二卷本の古書にて全部十二卷は偽書なり。三五中録も古書は絶て今有るは偽書なりとぞ。いふなるべし。伏見宮の二書とも真の物を御所藏なきとぞ。深く秘し給ふて人間に漏しなさぬとぞ

一須語云唐伯虎曰東坡赤壁一賦一洗萬古。欲髣髴其一絡。畢世不可得也伯虎亦英才。而推奬如此。其必有以也。近世文人。至非之曰何等狗賦。可謂大言不慚矣。余意赤壁即自叙賦

来者非耶云云春暉曰。亡友奥田仲猷。嘗曰。東坡文才絶倫如其赤壁賦。学之竭終身力不可得其髣髴也。仲猷為人豪放於詩文最其所長雖長編大作亦援筆立成自負才気少所推然而於赤壁一賦則極口賞之今聞伯虎論亦如此

一泰山集といふ土佐谷丹三郎重遠江戸乃浩川春海ゟ従ひ学ぶの日。宇師の語を多く録すゟ雑誌あり。宇ゟ人一昼夜之息凡二万五千許古人曰一万三千五百息可疑也云々

嘉暦前年太田松ら助と云幼年乃人の三十三間堂の射堂矢数を尺しるす乃ゟ其時の一昼夜乃惣矢数一万二千許前夜乃暮六ツ時ゟ射始め〻く翌日の夕申刻前ゟ終りゟ

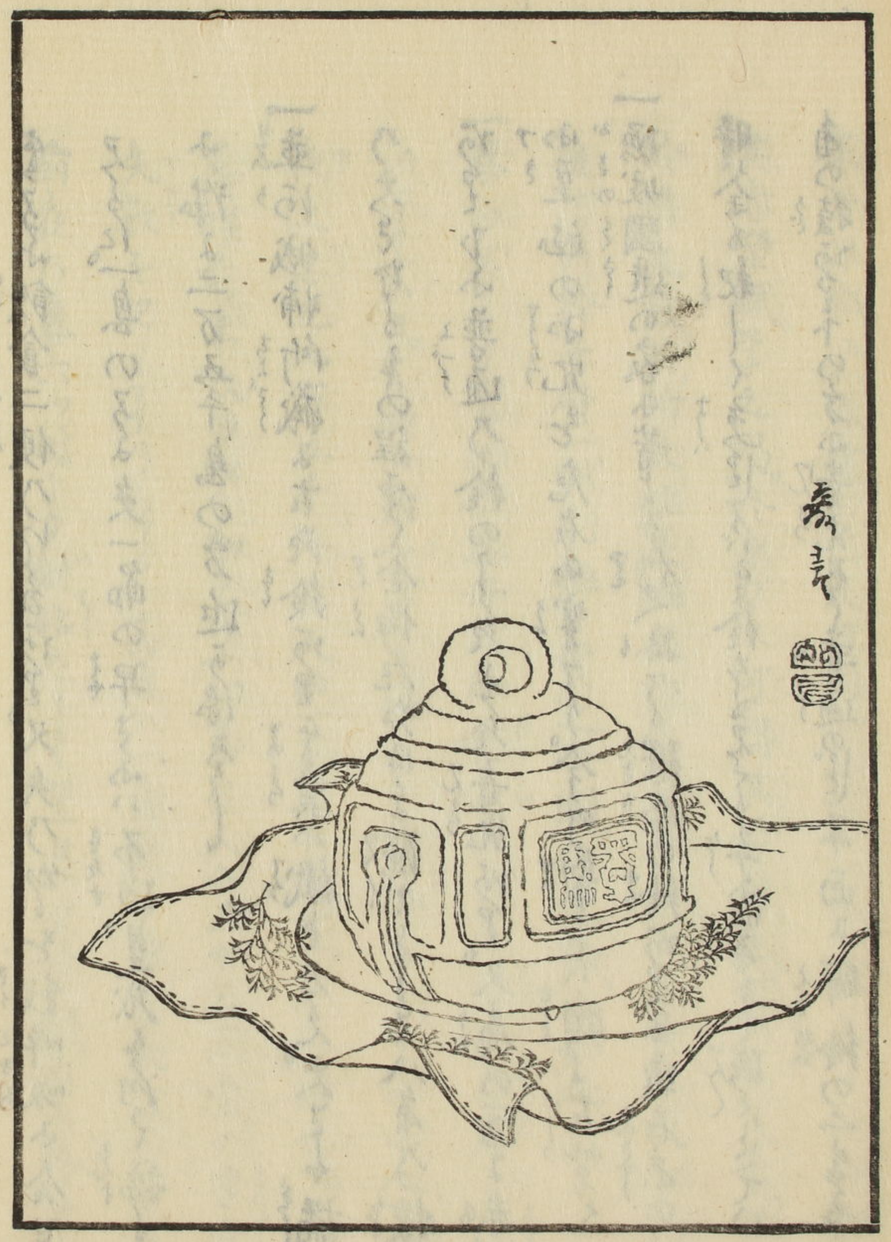
ゟ飲食二便乃ほかは。又矢乃出るを我呼吸ゟ合せ尺ゟ尺に。一息の内ゟ矢一筋の早さゟハ不過。是我ゟ引く掛る

ゟ誠ゟ二万五千息の方近ゟ歟

一並河誠所蔵ゟ古き鈴の型ゟ質ハ鐵と見え。大さゟ撮乃大きなるゟの程ゟく倉俗花中ゟ隅〻として八角乃緩ゟ

ゟ丸ゟ普通乃鈴の〻ゟ也ゟ音完ゟ。又扇の所ゟ赤ゟ至紅のゟ穴を左右ゟ穿てり。今乃製とハ頗ゟ古雅ゟ

一豫岐國造の家ゟ昔より伝く拂てる驛鈴の鈴ゟて玉造在系の時八角ゟ紐〻く矢尺ゟ鈴ゟ丸〻ゟ平ゟ四角ゟて隅〻ゟて八角の緩ゟ下の方ゟ青完ゟく普通のゟ平面ゟ驛鈴の二ゟ



綱乃古色愛玩し寶物數千年の物あり。玉吉清亮殊更
ふ青玉くしくよく青くゆ。

玉造名古幸成姓名官位名
く紳孫まく紳代より今まお續せり。綺麗成水好くまを
愛死人ありた

一佐渡の國はかまいさちよかあるとつふ吏いりく其氣
の中るとさろ大はきれく傷る此時は金瘡の如く縫
亦ハ膏藥など付とバ皆とじく死るあり只石菖
根一味煎じて洗ふべしとなり又其まくは捨をく
時ハ數日よしく愈るとを佐渡の外科本多勇伯

余よ語り伝りし

一常陸国鹿嶋の神庫にも驛路鈴この里とく雪降る頃

しふ。山伏乃持て錫杖の形にとく長き物なり。美銀の鈴

あや又天明年間河内国より掘出しかりとて書き細乃窮れ

形しなる鈴。糸く持ありて美しい人の手にふる。並河氏伝乃

宮よ御覧ふへきりしふ。是も我家よ多くく叶ハざるものとて

價を下されて乃ち買しとぞ。並河氏埃よ物語ありて　宮ま

何乃御用ぬとの事ぞ

一清華といふ今宮家の名家九条をいふ。清華とハ北斗の

顔之推ぐ家訓ふ出る字まるく。ハ朝の頃名ある家柄をいふ

一浪花の加茂景範ハ和歌の上手なく学ふも秀しとて糸

師ぬとも称誉ある人なり。近年ま色ぐれ歌書著述も多し

山城余彼人乃著述の和哥濵土産といふものを見しり。初

幼乃人和哥の含なぐふ撰ふる事ふ有益乃書あり。ち中ふ

小志衣を往しく大業會新業會あどの時禁庭まて舞人

乃著ある服ありとぞ。絶ふ数里なれとも浪華ハ糸ま

偏ぬ多ぐ。かるふ手近ある哥ハ者ハ考く

倣きり。糸乃人ま毎学乃人も知ることあり。小志衣ハ祭服ま

ろ衣ふ大業祭。新業祭。ち外神祭の時ハち禮ふ頭る人ハ共袴の美装

なく文官武官乃ちとちあく。皆小志衣ハ着ある事ふ有り。若

生ずるを舞楽一の巻む。舞人も若しく舞ふるなり。ひくくを舞
人の着する服と限りなく覚悟するハ一の
一浪華天王寺の楽人秦西名著述乃書ハ楽道類聚とする
出一の巻。古楽乃名残よく考へし出るなり。外ハ楽に一のぼかる
事を駁しく出集へしものなく珍出ありといふるを。山法先
生物語りあるしが。生像浪華にて一覧せり。帯上げく一覧せし
ハ級要しくも續はずもしが。大低ハ人乃性知る希る事を
多く載せるり養敷を多たるなり。體裁抄あるど類しなる
ものでやうなる思りる。生家久しく秘しなるよりなく。世間ハ希る稀
あり。多く結字しく弘まるも。治者ハ悦みなるんと思ひし

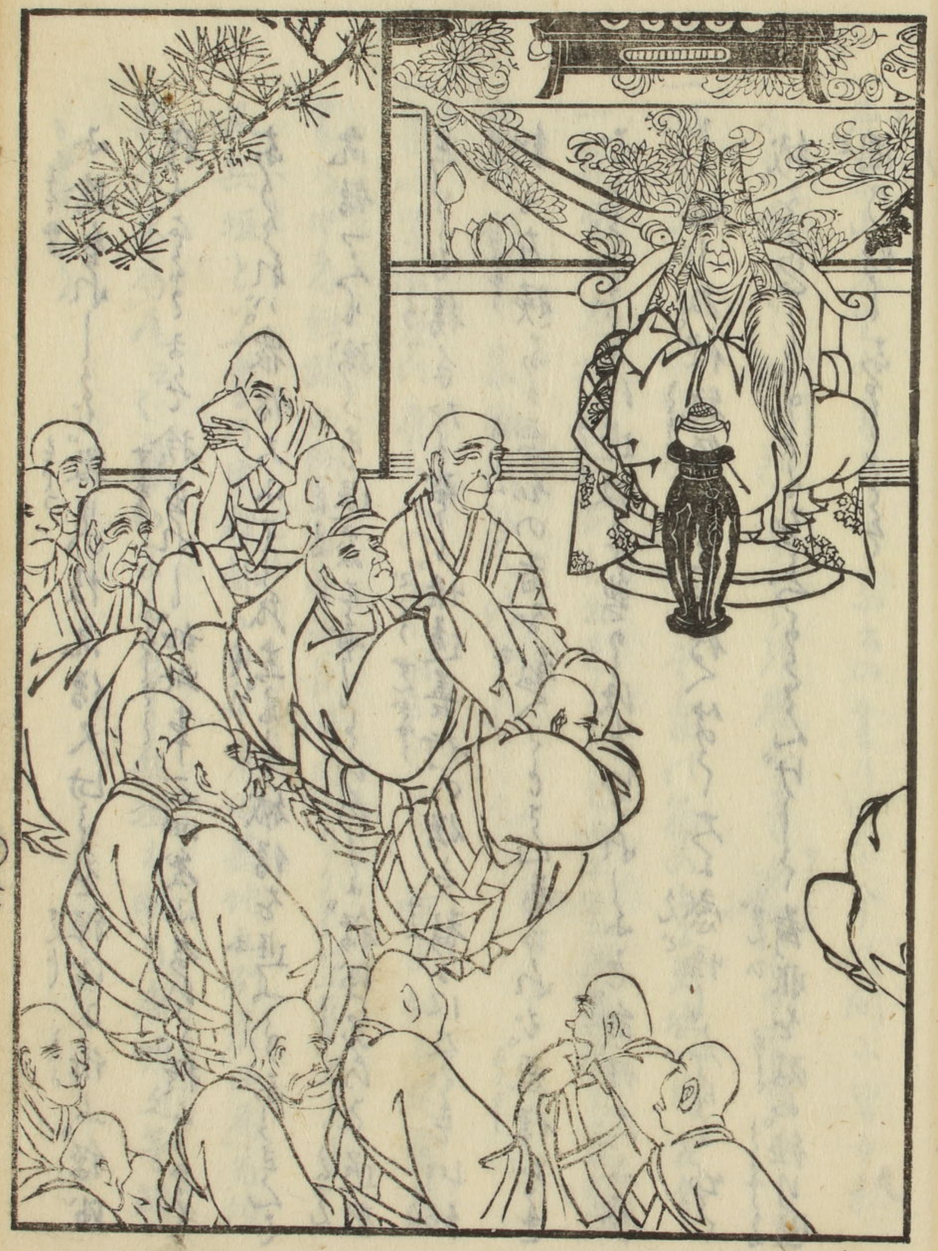
一天明年間ハや伯耆州屋載る村乃海中なく漁人の網ハ鼎
一つを引るり篆書の銘ハ一の巻工元乃世の聖堂祭器ハ用ひ
ける舊物なるる事ハ文なくなるなりと。滄洲物語あるを
一そなり百年ハ前なるなるや坂中玉嶋の西なる海の形の
物ハ貝多く付るを漁夫とも網ハて引上なり。有ハ丸形乃物
なり。此辺の酒色ハ一の巻ハ形乃物
多ハ拾ひて。酒にくく飲ハしなく。漁夫ともやでく彼酒色
ハ持りく酒二瓶ハかくんるをもしふ。酒色乃系代矣ハく。
ハ多乗乃物酒にのるるやこのんるけるて。彼色倫ハ合
くハるしたる。其ものハ何ものやと知くるる。伴の貝乃付る

其死物を持て来る所のものなれば何ぞ二ツ
も漁夫どもは是まで抹香きらう者も絶もなくしてよく所
をよくく作の物をみて苦同に疑ある連歌しる数日経て而
乃後彼物より流き落る而あるに織気ありて内に何か有
なしとて。是我手碎たる中より刀の刃を出すなむ
ととて伯耆国山の研屋へ形を礪をうけて友成と銘入
をくく見すま研上ると。ばかりにしまめしも奢侈せ及今
彩よ手出ます刀のかしそれすり刀剣のようく知る人ふたせる
ぬ。是を安倍しるこの。能登守教経所おの刀サクウ丸と云
太刀乃銘なり。概い教経乃刀をもてなれと。彼面色を珍ま

くく今よ生家ハ伝てりとて是も揚子乃滄洲茅物語ありた
一州乃雲接大師の作よ竹窓漫筆とい出ける。禅僧ハこの
文字ハ廣さを面白書なり又彼大師乃警世四絶を
畏寒時欲暑苦暑復思冬忘想能消滅安身處々同
忖得翻成失欲東仍復西未来杳無定何必豫労思
蠶出来抽業蜂饑樹結花有人斯有禄貪者不須嗟
草食勝空腹茅屋過露居人世解知足煩脳一時除
一穐斎の盤渓禅師無学人乃ものを示ふ魚じく法名我ものよ
らはれ。法名ハ文字ハ尼若しう名ハ。弟子卦紙を作を
く進ら世。是を乃ハ生ものを出ものといいしふそれよりものを

とくせられて由ゞ屋ざるし小或時明石乃医何某う給く
禪師を信じて毎度りて教を受しが人よ法名乃ゝを
教おきて禪師小乞し小禪師ゆうけがいく爺をとられし小何
とゝめちらん件の封紙乃ゝを乞れだ事ゝしく搜し求しゆ
ら所くに乃ゝを乞ちゞい僕く毒ゆ医も教ゝかゝ乃ゝ
事ゆ小乞乞ゝ医も遣ゆして又明日教より者ゝ乃ゝ封紙
を求るゆと加ゝ乃ゝを乞又乞ゝ医も遣ゆ医に數日乃遣ゆに
迷惑しゝゆどゝを乞ゝ乃ゝ搜し求
まゝゝも乃ゝを乞ゝゆ乃ゝ絶乃封紙教小作りもゝ乃ゝ
容易の事ゆりと毎度もせしゝゆゝ禪師笑ゝ乃ゝ辞小搜

求ゆしとゝゆく信居ゝゆれ乞又乞次乃日小教乃ゝ乞ゝ乃ゝ
大智ちゞし求めゝゝ小柳の奥ゝゝゞ求乞ゆしぬ禪ゆ見
を乃ゝゝゝゝ海等ゝゝゝ乃ゝ茅の絶ゆ屋ゝ如此ゝゝ乃ゝ
と医ゝ是茂等ゝ感ゝしゆる數日乃遣ゆの益ゝゝゝと
悦びゝく海乃ゝぬ
一盤渓解師搜奪ゝく統制乃時僧徒數百人事乃集り居
ゝゝしゝゝ中ゝ絶ゆ銀乃を乞ゝし何某ゝ衣
服を盗きしゆゞ毎日絶失物ゝゝく疑ゆ及ゞしゆ埃ゆ
ゝ賊を求せゝ僧ゝ仏ゆ知き乞れゞ衆僧一統ゝ解ゆゆ
て絶僧を遣放せんゝを乞ゝゆ禪師ゆ屋けゝゝゝ



ふ捨られしうぶ。數日の怪流俗又けるを禪門ふ作ふ。禪門
狂ふ[illegible]まそ捨られし。如此事二四度ふ及ぶく終[illegible]
あり[illegible]れば。衆僧大ふ[illegible]紙[illegible]し。絨俗を退[illegible]ふ[illegible]
流俗アイ[illegible]退轉[illegible]とい[illegible]。禪門多ふく近敬
[illegible]む猜多[illegible]。悟道善行の俗も敬るに及ぶ。此結
制も左横ある悪仏の者を敬ふ[illegible]者なれむ。悪俗なき
むとくぶに退敬[illegible]の次といれしふど。流俗大ふ感
し服しぬ。彼絨俗ふ是を侍く[illegible]大ふ感悟し。[illegible]
絨をあせしるとふをぶ[illegible]
固乃俗とあしとぞ

一屈景山先生の書をしふ古の書乃ほ今俗間ふ男女私
ふ[illegible]悪して仏中孔[illegible]ると紙唐土[illegible]女棚とふとぞ
一同書の中ふ東野別常縁古今集ば箱の上ふ天地一馬古今
一貉雪風花拒攘千古と云きしとそ世ふ是紙箱と云是
茂野別より宗祇法ふく侍られしと
一奥の字迫ば仏人の多く用る字なり勉氏知不足齋叢
書乃中奉經跋の所ふ日本ふ長崎奥[illegible]とふ[illegible]
又兵垣とふ書乃中殿都乃日本考ふ其地九州居西為首陸
奥居東為尾云く奥の字[illegible]兵垣を明乃唐順之等輯
る書あり

一周行備覧という書は唐本五六冊なり。唐土の行程
地志なり。驛々名所古跡系譜等のこまくしくめぐる程
一天文の一技は西洋を宇宙第一とすべし。推歩側量の精妙言
語に絶せり。其書は靈臺儀象志崇禎曆書最全備の書なり
く天文曆学の人多くて叶ぶべき書なり。大西の天学者ども
利馬竇。南懐仁。湯若望。艾儒畧等なる名の人多し。又地理の
書は。職方外紀。八荒譯史。寰初新志。坤輿外紀等なる外
多し

一秦の趙高が言葉は斷而敢行鬼神避之と此八字実は豪傑
事を成す人の語とする。中心一疑を生ずるより種々の妖

魔起りて業の妨をなすなり

一凡士なる者学問事業の内なる。業を成すべきなり。如
何程も疑を起し切磋琢磨しなくてはあれども
所為事を行ふ時は。中心の疑惑狐も魔の疑ふるなり
あるべきなる。逢ふ逢ふ影無しとなる。行人が為なる。居常平素心掛る
ことなり

一王陽明先生宸濠の難を伐し時。反間を放しは。宸濠
謀ありしは。彼必信を金の如しといれし人乃至しに。卻て疑ひ用ひ
ざるべきなり。やはりいれし人等は。徳を慕ひ旅
とゝなれども。其一反間乃ごとくあれば一大事の妨なれば

まことしハ疑ひなく要ハ其しるしまでも湯明悦ひなく若
城の一疑をあしはるも我ら成んとなれし
一明乃屋長卿ら作乃山中一夕話とりなる書ハ天狗乃字なく
日亭の天物乃るるハ類せるるこの事
一松永弾正左貴山為城の時常々秘蔵乃平蜘蛛の釜を敵
乃手ハ渡さんとを毎日ハ大中ら投しく砕し殺傍
ハ人ハそこに拾のうつて逃そしが今ハ伊勢国何ぞ乃家ハ
秘蔵ありとそ。ら絶を滄海為ら形をうと彼為物語りあり
如真の物なりやいなしし
一寛永四年壬子四月のすちし山城國淀の小横大路とハ里

ハ乃ちそ。村乃左屋を若左衛つとりハ其家乃裏の為ハ土
蔵あり左蔵の傍に大なる銀杏樹ハ年迫年大風ありぬく
屋ら左為ハ屋を下枝まて払ハ為し水ハ若左衛ハ山とや
とハ下枝を切掃ハせくるに。隠くハ下ら切ら切て出ハ々ハ
やりく上に登りこつまるこ乃所ら為ハ為ハ成る
枝を切んとせしに。俄ハ強風吹来て山ハ前翁を何ぞ物ハ
くはのむやりハ見くく。分乃毛ぞつと立られて抜大ハ右を
為ら迷ひ乃ハ前翁ハ乃毛つはるこ乃ぬ引ぬて顔色土
乃ちくハ成ら。若左衛つも怪くく何ぞ為やしハ。抜ハ為
天物乃怪為ハ所を切ハ乃ち抜ハとで思ハ乃今ハ抜く

かくて一命たちまち失なはんを。殊に此上の崇りもおそろしとて。依に
樹木に神酒を備へ。罪を謝し過をいひて当日の賃銭をそなへ
免して逆鱗をとゞめ。其三日まで其所を甚清浄にして修理をなせり
何者なるか。何れも神物の名にし負ふ處かやと。若党共にも恐れ
て此銀杏樹を敬しける。此ゆゑ若党共の親類の噺せる物語
なりき

一泉州堺の医に中井宗珠といへる人あり。三四代もこの前の宗
珠名医の名高かりし。或夜一老婆来りて。某村の者にて候が子
乃病気にて危き事ありといひしかば。宗珠呼入れて逢ぬ。婆如
何なる病ぞと問ふ。彼婆いふ。毒蛇にかまれて盗賊のくせ

何とて疑義にはあるぞ。何れも君の御薬料を與へ帰さるゝ此老婆
しか申すにと余義なく打ちなれど。宗珠暫く思案して包みける
とく薬を包みて與へ。程なく其子なる者ぞ怪しみて。病にも
何らぬ者に先生の薬料を与へ給ふは如何なる事ぞ。宗珠答へて
我は医家の何にもせず薬料を与ふ。渠も悠古の啓に考へ見
よくつくれしかど。当国にはよき医をば何ぞ授けたる事は気問ければ
されどもよく我が肺臓を乾かす薬を与へられ。もし常に咳
嗽あらば盗人の業は叶ふまじといはれし。是智の名あり

一並河五一郎因勤勉の父を。並河誠所といへる丹波国並河
村の人なり。誠所幼年つ丹波より山城国多紀村へ出て来りしを

なりより五一郎幼則いとけなき時ふ迫所の人ゟ教ゆく四書の素讀を学ばせたまふに。或時傍語の我黨ふ身を寄せるゆ所をとりふ章を讀を学ぶ。是ゟ怪しきなりとて又乃思事あるゆをそなふ何として乗しといふ答えやといひなる。やがて次の孔子乃御言葉を学ぶ。加ゝる答えなるゆ乃孔子ゟ新を人なりと云ひしとそ。泝右屠つハ文肯無学の人なゆ四書の素讀をも略ゆ学ぶ程の人なりしゆ。ちなる所ゆのゆし。五一郎幼則の父といふ者し。ゆゝなる子孫並河清則物語あり。

一並河幼則ゟ天民とらいく五一郎の事ゟ二十才の時仁齊先生ふ従ひ廿六才乃時仁齊の経義ふ不審ゆて一日大に悔し。ちなほハ自身の發明乃見識なしとそ。然ゝ先生仁齊先生一生ハ師恩我敬ゆるゆ深ゆ次。我子孫ゟ遺言して仔茲敬我為略ふ学ぶべしといはしめられしとそ。天民音傑の質ゝ新毋家人なりしが四十ゆ死せりゝ兄我五一郎とゝふ五畿内志我撰述せんとをゆ思ふ願ゝ志ゝ。ゝ儀ゝ作付ゝゝ学ぶ御歩行ゆて五畿内何方ゝも御解ゆゝ五一郎巡行し神社佛閣乃諸家の秘絶秘物我も一覧して五畿内志成就し写本あく官ゝ献上せり。ちなほ徒玉楮遊行し。伊豆玉三嶋ふ住し学校を建立し自身の居室をも捨へ年七十餘ゆく三嶋ゝ

一唐土の医は文勝て質少し日本の医は質すして文なし

一某の効く治察まいり人を治するは難ふしてこゝの〳〵治するは易し余医はまろさしてよろいうある大病の時とゝ

も他人の薬を按をし事なし人を治察するも自

察する程よ明ふうよ有さきものあり

一後伺の府中七間町捉物屋ゟ唐つゝ天文の仙台ゟ来る人を

く北極星を測るゝふ府中出人町まく測るゝ富士山の八

合目ふく測るゝ〳〵元三度ゟ残差とあり富士山ゟてゝ三十

九度ゟ及ぶりと給りるゝ如意道人物語り

一尾張の国名古屋乃入り口ふ前津とゝ唐ゟり此所乃人

ふ白義といるゝ古鏡を多く所蔵せりとゝ。余も所拾

乃神代鏡ふどの墨ふ拓りたる成五ゝ分ゟ

一摸刻加古川の瓢乃南ゟ里ふ刀田山鶴林寺とゝふ古る

聖徳太子乃建立ゟ寺ふく古時分の堂宇ゟふ残ゟる有

此ゟの種古物ゟく古変格ふ妙ゟ形ゟ尾上乃鐘

ふ似く小さしゟる二尺四寸経ゟ幸ゟ人十寸五分厚サ四寸強形

乃傍ゟ穴ゟ穴ゟ穴ゟ穴ゟ穴ゟ穴乃ゟサ十寸五分周囲十寸

穴内外ゟ透ゟ其律一越乃清律ゟり。ゟる九律ゟ他の

尋常の種乃ゟふふ格ゟ異ゟりと笑ゟ。銘ゟし余考ふるふ

梁武帝のはかり物とやと思ふ。梁朝の日本使来朝し貨物も来まりと見る。多律一斛の清泉ありと本邦伶人家伝来ふ古乃黄鐘律を今の律管乃一斛ふ当るとしるすもあや。但来の説ふく古乃黄鐘律今は黄鐘律ふ当ることは疑ふあれど。此鐘一斛律ある水深き敬畏すべしと思ふ

一泉別墅乃東六七丁ばかりふ。仁徳天皇の陵ふ俗ふ大仙陵とふ来と大ふしく南北なり。長さ三四五十丈ばかり。周廻ふ池ふ。陵ふ北乃方高く南の方低し。樹木影象生茂ふ

長大なる天造の岡山乃ごとく人作ふ比べふふ小ふ見えぬ。今も樹木を切り下ふを刈ふ官より禁じ雑人乃入るるを防ぐ

天下乃陵の大なるもの此陵を第一とすべし

一但馬国所田とい所ふ氏家の娘ひとりふ通ずる男ありふ

福原く終ふ懐妊し平産しくるふ四つふ成産せり。皆形り

整くみるまく。頭ふ人ふく毛生狐ある水ふ。首ハ狐まく毛生

人ある水ふ首ふ狐の男ふ化しく女通せしふふ。ひとりふくあと仏

義恵所物語り云